

日本人の宗教観、八百万の神と神道

お爺ちゃんも、お婆ちゃんも、お父さんも、お母さんも
皆、死んで神になる！

日本人の宗教観は米欧、イスラム圏の一神教とは大きな違いがあります。日本は八百万の神々の国なのです。

日本では日本神話に現れた天地の神々だけではなく、山の神、川の神、田の神、海の神のような自然を神と崇めた神が多数存在します。

縄文時代からあったと推測される神道は日本人の信仰の中心にあって、3つの信仰に基づいています。

- ①偉大な力を持つ山、海のような豊かな自然に神が宿るという自然信仰、
- ②死者を祀る御霊信仰、すなわち人は死ぬと皆、神になる。死者をこれほど祀る社会はありません。
- ③それと皇祖霊信仰、この皇祖霊信仰が日本神話を生み出しました。

現在のような社をかまえた神社は6、7世紀に出現したといわれます。日本では死者の数だけ神がいるのです。

自然への崇拜、一神教(キリスト教、イスラム教、ユダヤ教等)ではなく多神教。仏教が伝来しても古来からの神道と共生しているのが日本の特色です。

作家の五木寛之さんは次のように言っています。「日本全国には20万を越える神社・仏閣がある(12万5000以上の神社と7万5000を越える寺)。

世界に、ひとつの国で、こんなに多くの人々が生活する身近で霊を慰める場所(ヨーロッパの教会に相当)のある国が存在しているのでしょうか？」

日本の神社・寺は緑に囲まれ、小さな森を形成しています。自然の風景そのもの。鎮守の森とは神様のいる森のことです。西洋の教会は町のど真ん中にあり、日常のコミュニティの場になっています。欧州では教会の拝殿は東側、エルサレム方向にむいています。

寺(仏教)は6世紀にインド、中国経由、日本に伝来。神社の神様と調和(神仏習合)、庶民の中では神と仏が違和感なく同居しています。寺は仏になるための修行の場。寺には故人の墓がある。人は死ぬと身分・地域の差なく仏式によって葬られ、全員が神となっています。

日本人は昔から寛容であると言われます。この寛容性は神道と仏教の習合からくるのではないのでしょうか？

正月の七福神めぐりで、日本の神様は一人(恵比寿)、三人はインド(大国天、弁天、毘沙門天)の神様、三人(寿老人、福祿寿、布袋)は中国の神様が日本に来て日本の神様として同化し日本人の生活の中に定着しています。七福神はインターナショナル、インド・中国・日本の神様が共存しています。

霊あるものはすべて神。神道では先祖の霊を神としてあがめ、死者の霊を仏様とよぶのが日本人の死生観です。

伊勢神宮こそ、日本の原点の神社です。

もともと神宮(伊勢神宮)は皇室(大和朝廷)の祖神を伊勢に遷し祀ったもので、他社のような私幣が禁じられていました。

平安時代から鎌倉時代にかけて貴賤を問わず参宮する者がふえ、江戸時代には全国各地からお伊勢参りが行われるようになりました。

皇祖神が日本民族の総氏神的な性格を持っており、誰にも伊勢神宮が身近な存在となっていたのです。

20年ごとの遷宮は7世紀後半の天武・持統天皇朝に正式に公式化され、現在まで1300年間以上続いています。まさに、式年遷宮は日本文化の特色の一つです。

技術・伝統・作法等の人から人への伝承という意味合いを持つ遷宮は木の文化が如実にでています。石の文化ではこういうことは無いでしょう。

その遷宮費用は、織田信長も秀吉も応分に寄進し、徳川幕府は全額負担しました。明治以降は国費で賄われ、戦後は、国民の献金で行われています。

平成5年(1993)が第61回の御遷宮。第62回は平成25年(2013)で既に平成17年より準備に入っている。